

これまでの子育て家庭に対する支援施策検討にかかる意見要旨

(第 1～3 回部会)

I 保育・子育て支援の充実

- ・ 子どもが病気やインフルエンザになったときなど、いざというときに利用できる仕組みがないことが保護者にとって非常に精神的な負担になっている。
- ・ 子どもが急に病気になったときにどうすればいいかの情報を得ることはとても大切。
- ・ 病児・病後児施設については、施設は増えているが職員が見つからない施設もあると聞く。職員も充実していかないと意味がないと思う。
- ・ マイ保育園制度の加入は 300 か所程度ある保育所の 6 割くらい。もっとたくさんの施設が登録できないか。
- ・ 学童保育が十分とは言えない。それまでと同じように働くことができないことになる。
- ・ 熱が出て本当に病気ときは看護師がいないと対応できない。保育園、幼稚園だけでの対応ではなく、医療機関との連携を施策の中に入れてほしい。
- ・ 放課後児童クラブは、指導員の体制の充実ということが大変。退職した教員や看護師などを含めた医療関係の方も含めて、人的な充実を図ってほしい。
- ・ 放課後児童クラブは時間的にも年齢的にも拡大していくと思われるが、ニーズに対して放課後児童クラブだけでよいのか。ファミリー・サポート・センター等の関連施策やマイ保育園と母子保健の施策・サービスといった関連分野あるいは関連施策の連携で総合的に展開する必要がある。また、それらのサービスを充実していくにあたって、人材を確保することも重要。

II 子育ての負担感の軽減

- ・ 地域の中で孤立感を持っている親が増えている。
- ・ 本県は子育てについて相談できる相手は「親」であるという比率が圧倒的に高いが、親だけではなく、より多く相談できるような資源やネットワークの拡充が大切。
- ・ 父親の育児参加が重要なポイント。母親の負担が大きすぎる。
- ・ 毎日の育児の負担感は、子育て支援センターに子どもを連れて行って解決するよりも、日々、夫がどれだけ手伝っているか、父親の参加がどれだけあるかが重要。
- ・ 子どもが 3 人以上いる家庭は父親が協力している。男性への教育は大切だと感じる。まず子どもが生まれた時に出産に立ち会う経験をするという、父親としての参加の機会を明確につくっていただくことが大切。
- ・ 子育て支援センターや保育所での父親向け育児講座は、父親に参加する時間が必要。企業側にも伝えて、危機感を持ってもらいたい。
- ・ 育児講座は世代間の交流を図るという観点も重要である。
- ・ 子育て支援センターはかなり普及してきたと思うが、もっと個々のニーズに応える機関、

きめの細かな身近な所での相談機関が必要。

Ⅲ 経済的負担の軽減

- 保育料の軽減により、3人目を生むための気運が生まれてくるのではないか。
- どこの部分で保育料の軽減をすれば一番恩恵があつて、もう1人生もうとなるか、考えてほしい。
- 3歳未満児の子どもが1人いるだけで共働き夫婦が一生懸命働いても5万円近い保育料を払うのは大変高い。
- 経済的支援はとても大切。3人以上いる家庭は裕福だから3人以上いるのではなく、本当に厳しい中でも家庭を充実させるために頑張っている。
- 子ども2人が保育所に入所している場合、給料のすべてが保育料となってしまう。実感できるような負担軽減の方法を考える必要がある。
- 保育所に3人同時入所していると、約1人分の保育料で行けるのだが、あまり知られていないのでは。

Ⅳ 出産年齢・ライフプランの理解

- 第3子を増やすということについて、生み始めの年齢が遅すぎる。生み始めを早くできるようにしてほしい。
- 出産年齢はとても大切だと思う。自分が何歳から何歳の間に出産したら子どもたちをきちんと育てられるかということを考える支援、システムをつくっておくべき。
- 生み終わりが37歳という感じにさせていただくことが大切。第1子、第2子、第3子の間隔をもう少し縮めないと、ほしい数の子どもを生めないということは知らないといけないので、教育は非常に大切だと思う。
- 県は母乳育児を推進していると思うが、母乳育児をしている間は妊娠できないので切り上げる時期も重要。
- 今は男女とも大学かその先まで進学するため、社会に出るころには、20代半ばの結婚年齢、出産年齢となっているが、生活基盤はできていない。そのような状況でも子どもを早く産んだ方が良いという気運に高めていくのか、明確にする方がよい。
- 高校や大学の時に、ライフプランを実際に立ててみるというような教育を、もっと強力に進めていく必要がある。
- 不妊治療の難しさについても、数値として大学生などに伝えていくのも良いのではないか。

Ⅴ 子育てに関する意識・理解

- 若いうちから「子育ては楽しい」「たくさん生んでも何とかなる」というイメージを持つことが子どもを生みたいという意欲につながるのではないか。

- ・子育ては大変だが、楽しく意義のあることで、若い人たちが子どもを安心して生んで育てられるようにしなければならない。
- ・子どものいじめや不登校などの話をすると、皆子どもたちのことを一生懸命考えている。親学び等を通じて親同士のネットワークを広げようと思う。
- ・子どもの数がただ増えればいいというものではなく、教育や環境、家庭が健全であってこそその少子化対策だと思う。

VI 仕事と子育ての両立

- ・親が子育てに対しての時間的な余裕を持てるよう企業側の理解が必要ではないか。
- ・労働時間を短くすると女性が正社員でいられ、経済的にも安定し、第3子を生みやすくなるという傾向もある。
- ・子どもが小さいときに一番気になるのは夫の勤務時間。夫の勤務時間が長く、夫婦で一緒に育てる意識がないと第2子、第3子と増やしていくのは難しい。
- ・生活の場と職場が近い自営業では、両立がしやすいが、富山県は自営業率が低く、第3子出生比率が低い要因の一つとなっていると考えられる。自営業の良い所を企業で働く人にも採り入れるようなことも必要。

VII 子育て家庭に対する住宅支援

- ・富山県は持ち家率が非常に高く、家を建てたいとなると、子どもを1人増やすよりは家を建てることを考える人が非常に多い。